

ロゴスと神話 - チャールズ・オルソン「人間の宇宙」覚え書き -

著者	平野 順雄
雑誌名	人間関係学研究
号	14
ページ	35-48
発行年	2016-03-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00002351/

ロゴスと神話 ——チャールズ・オルソン「人間の宇宙」覚え書き——

平 野 順 雄*

Logos and Myth:
Some Notes on Charles Olson's "Human Universe"

Yorio HIRANO

キーワード	チャールズ・オルソン	Charles Olson
	「人間の宇宙」	"Human Universe"
	『人間の宇宙』	<i>Human Universe</i>
	マヤ族の神話	Mayan Mythology

チャールズ・オルソン著『人間の宇宙』(*Human Universe*, 1965)の巻頭論文タイトルは、著書と同一の「人間の宇宙」("Human Universe," 1951)である。「人間の宇宙」を読むことは、古典古代のギリシャにおけるロゴス中心主義の思考法から離れて、人間にとって正しい思考法とはいかなるものかを学ぶ過程である。ただし、話はそこで終わらない。人間にとって正しい思考法がどのようなものかが語られた後、最後にマヤ(Maya)の神話が披露され、「人間の宇宙」は堂々とした完結に向かうのである。

「人間の宇宙」の流れを追うと、Ⅰ.ロゴス中心主義の思考法批判、Ⅱ.マヤ族の教え、Ⅲ.経験の奪回 Ⅳ.マヤの神話の紹介、という順になる。ⅠからⅢへの展開は滑らかである。ロゴス中心主義を脱し、マヤ族の教えをヒントにして、経験の奪回へ向かう論理展開に無理がないからである。しかし、Ⅳのマヤの神話紹介はどうであろうか。ⅠからⅢへの展開には論理性があり、その中でマヤ族の優れた面が示されている。だから、Ⅳでマヤの神話が出てきても不思議はないはずなのだが、どうしても唐突であるという感を否めない。その理由は、ⅠからⅢに接続できるような論理性がマヤの神話には見出しがたいためである。

しかし、「人間の宇宙」が受け入れられる論であるか否かは、Ⅳのマヤの神話にどれほどの説得力があるかによって決まるのである。本稿の目的は、第一に、ロゴス中心主義批判から出発した論文「人間の宇宙」が、マヤの神話で終わることによりどのような論理が見いだせるかを探ることである。第二には、その論理が詩論構築者としてのオルソンのどのような面を明らかにするかを究明することである。

*人間関係学科 教授

I. ロゴス中心主義批判

古典古代のギリシャの思考法が正しくない、とオルソンは言う。言語が一般化する (generalizing) 道具として機能し、その結果言語が人間の感受性を縛る方向に作用して行ったのだと、オルソンは主張する。

i. 一般化の道具としての言語

われわれは、一般化する時代に長く生きた。その時代は少なくとも紀元前 450 年から始まるものだ。一般化する影響はその時代の最良の人々と最良の事物に影響を与えた。例えば、ロゴス、あるいは論述 (discourse) は、この間に抽象をわれわれの言語概念と言語使用の中に入り込ませたので、言語のもう一つの機能である話し言葉を回復することが急務であると見なされた。それで、われわれの中には、象形文字 (hieroglyphs) や表意文字 (ideograms) に戻って、バランスを正そうとする者もいた。(ここで行っている区別はその瞬間の行為としての言語と、その瞬間について思考する行為としての言語である。)(3-4)

括弧の中で説明されているのは、話し言葉と思考するための言葉との区別だと思われる。引用文中の言葉で言えば、「その瞬間の行為としての言語」が「話し言葉」を指し、「その瞬間について思考する行為としての言語」は、「抽象」「ロゴス」「論述」すなわち、「一般化する言語」を指している。

ギリシャ以来ずっと、「抽象」「ロゴス」「論述」の方に、つまり「一般化」の方に言語使用が傾きすぎてきたので、「話し言葉」すなわち「その瞬間の行為としての言語」の方の重要性を考えなければならないと主張しているのが、この引用である。

別の表現をすれば、抽象が現実には勝る状態が続いて久しいが、それではバランスが悪いと言っているのだ。しかし、言葉の置き換えは混乱を生む可能性があるので、できる限り控えることにする。

ところで、上の引用で、「我々の中には、象形文字や表意文字に戻って、バランスを正そうとする者もいた」とされている。表意文字を詩作の方法論として用いた人と言えば、エズラ・パウンド (Ezra Pound) であることは、言うまでもない。しかし、象形文字に戻った人というのは誰の事だろうか。われわれは一抹の疑問を胸に抱きながら、先へ進むことになる。

ii. ロゴスが人間の経験を締め出す

ギリシャ人はあらゆる思索が「論述の宇宙」(“UNIVERSE of discourse”) に閉じ込められていると断言するまでになった。「論述の宇宙」は、彼らの作った語であり、あらゆる哲学者の避難所である。(中略) われわれが共通に持つ、それで十分な、力と美は、言葉で誇張する必要がないし、特に広がって行く「宇宙」(spreading one [universe]) などという語を用いる必要はない。(中略) とにかく、これほど拡張されることによって (ロゴスには生きた話し言葉よりも大きな役割が与えられている)、論述は経験からかなりの部分を横領してしまったのである。横領された経験は、手を出してはいけなかった——今や、価値のある二つの宇宙にのみ返すべきなのである。それは二つの現象的な宇宙である。

その二つの宇宙の方でも人間を頼りにするため、人間が頼りにしなければならない二つの宇宙に返すべきなのだ。それは、有機体としての人間の宇宙と、人間の環境、地球と惑星の宇宙である(4)。

論述 (discourse) が経験から離れてしまうばかりでなく、経験を論述の中へ吸収してしまい、経験そのものを奪い去ってしまう事態が生じた。論述に奪われた経験を返さなければならないが、返す先は「有機体としての人間の宇宙」と「人間の環境、地球と惑星の宇宙」の二つの宇宙のどちらかであると断定される。では、どちらの宇宙に返すべきだと論者は言うのだろうか。

論者はわれわれの問いには答えない。「論述」によって「経験」が奪われるような事態がなぜ起こったのかを、ひたすら解説するのである。「二つの論述方法」が「経験」とわれわれとの間を裂く障害になっているのだと、オルソンは言う。

iii. ロゴスと経験—ソクラテスとアリストテレス

われわれは、分からないままなのだ。ギリシャ人が考案したと思われる二つの論述方法(two means of discourse) によって、われわれが自分の経験を味わうことをどれほど甚だしく妨げられているか、したがって発見を阻害されているか。二つの論述方法は、ソクラテスの一般化する構えと、論述から「宇宙」を作ろうという意欲(ソクラテスにはそういう傾向がある)に由来するものである。(中略)(ロゴス、およびロゴスに必要な理性は、人間がマスターする単なる一つの段階であって、決して最終的な鍛錬ではないことは、十分に観察されていない。ロゴスや理性の彼方に直接的な知覚(direct perception)があり、論理を打ち負かす、相反するものの群れがある。宇宙の調和は、そこに人間も入るのだが、論理的ではない、正確に言えば、ポスト＝論理的である。どのような存在物とも同じように。)アリストテレスと共に、二つの主な方法が現われる——論理と分類である。この二つが思考の習慣に絡みついたので、行動は干渉された、絶対に干渉されるようになった、と言わなければならない(4)。

引用の前半をご覧ください(1-5行目)。問題になっている「二つの論述方法」は、ソクラテスにその源があるとオルソンは言う。「一般化する構え」と、「論述から『宇宙』を作ろうとする意欲」はソクラテスの持つ傾向であると言うのだ。なるほど、前者の「一般化する構え」は「経験」から個別性や一回性を奪い、「経験」を一般的な概念にしてしまうだろう。また、後者の「論述から『宇宙』を作ろうとする意欲」は、「経験」を除外し、言語から「宇宙」を作ろうとするだろう。確かに生の「経験」が入る余地は、ソクラテスの「二つの論述方法」にはないことが分かる。

引用の半ば(6-11行目)の括弧の中をご覧ください。そこに書かれているのは、ロゴスおよび理性は、人間の鍛錬の最終段階ではなく、単なる一段階にすぎないという価値判断である。ロゴス中心主義であるなら、ロゴスこそ最上のものであって、人間はロゴスや理性を使うのではなく、むしろロゴスに仕えるのが正しい生き方だということになる。

オルソンは「投射詩論」の中で、投射詩人でない詩人として T. S. エリオット (T. S. Eliot) を挙げている (*Selected Writings* 26)。T. S. エリオットの『四つの四重奏』(*Four Quartets*, 1935-1942) に冠された二つのヘラクレイトス断章のうち一つ目「ロゴス(理性)は万人のも

のであるのに、多くの者は自分の理解力があるかのように生きている」(日本語訳に際しては Hermann Diels 151 を参照した)が即座に思い出される (*Collected Poems* 189)。エリオットはロゴスに仕えることを正しい人の道と考えたのである。

オルソンはロゴスを至高のものとは見ずに、「直接的な知覚」、「論理を打ち負かす、相反するものの群れ」、「宇宙の調和」がより重要なものである、と引用文の括弧の中ではっきりと言っている。この瞬間にロゴス中心主義の思考法は、絶対的な力を奪われ、当然ながら「論理」も王座から追われる。『四つの四重奏』のヘラクレイトス断章を補助線として用いると、オルソンの表明していることの詩論的な意味が明らかになってくる。ロゴス中心主義の時代(エリオットの時代)は終わり、今や「論理的な時代の後の」(post-logical)時代がやって来たのだ、とオルソンは高らかに宣言しているのである。論理の後のものが、これまで論理によって占有されていた力を持つようになったのである。

「アリストテレス」で始まる引用の後半(最終4行)をご覧いただきたい。ソクラテスにあっては、「一般化する構え」と、「論述から『宇宙』を作ろうとする意欲」が「二つの論述方法」であり、「経験」が排除された。アリストテレスは、「二つの主な方法」(the two great means)を著わした。「論理」と「分類」(classification)である。これは思考習慣に絡みつき、人間の行動(action)に干渉した、とオルソンは言う。明言されてはいないが、生の「経験」は、アリストテレスの「論理」や「分類」からも、排除されることになる。

「論理」と「分類」がいかに直接的な経験から人を遠ざけるかについて、オルソンは『わが名はイシュマエル』(*Call Me Ishmael*, 1947)の中で、こう語っている。

論理と分類が文明を人間の方へ導き、空間から離れさせていった。メルヴィルは空間に赴いた。厳密に調べ、人間を見つけるためだった(14)。

人間にとって重要な経験、アメリカにおける空間体験が、アリストテレスの「論理」や「分類」によって、締め出されるのである。メルヴィルが奪回しようとしたものこそ、アメリカにおける空間体験であった。

iv. ロゴスと経験—プラトン

次いで、オルソンはロゴスと経験に関するプラトンの思考をまとめる。

偉大なギリシャ人の中で三番目の人、プラトンを無罪放免にすることはできない——(中略)彼のイデアの世界では、形式を内容と分離できるが、その世界は論理と分類に劣らず危険を孕んでいる。(中略)どのような種類であれ観念論(Idealisms)は、論理と分類に劣らず、手段以上のものになる瞬間に、目的のための方法ではなく、目的それ自体になることが許される瞬間に、目的になる瞬間に干渉するものとなる(5)。

ソクラテスやアリストテレスを非難する時と比べて語調は弱い、プラトンのイデア論を批判していることは間違いない。「イデアの世界では形式と内容を分離できる」と言っているところが、プラトンのイデア論とは少々ずれがあるように思える。イデアの世界こそが実在の(真実の)世界であり、この世はイデアの世界の写しであるというのが、イデア論の要点であった。

アイデアの世界に事物の真実の内容と形式があり、この世はその写しでしのいでいる、と言うなら分かる。換言すれば、アイデアの世界の「一」がこの世の「多」になるのであると言うなら理解できるのである。しかし、オルソンの要約だと、アイデアの世界の中に形式と内容の分離が起こっているように見える。そこが、受け入れがたいところである。

オルソンのプラトン哲学批判を追うことにしよう。観念論は「論理と分類に劣らず、手段以上のものになる瞬間に（中略）干渉するものとなる」。観念論は人間を経験から、そして経験にいたる行動から隔てるのである。そこが決定的に、これから提示する「人間の宇宙」とは異なる「観念論の宇宙」の限界なのである。プラトンのアイデア論を観念論と断じて良いものか、にわかに答えは出ないが、オルソンの論を一旦受け入れて、アイデア論を観念論の一つ、あるいはアイデア論を観念論の源と見なしておくことにしよう。

しかし、ソクラテスやアリストテレスを批判する時と、プラトンを批判する時の口調には、見過ごし難いほどの大きな違いがある。前者に厳しく、後者に甘いのである。更に、プラトン批判は粗雑になされており、緻密さに欠けるのである。また、ソクラテスの哲学と言っても、それはプラトンが書いたソクラテスの言動から導き出されたものである。オルソンのギリシャ哲学者批判は、構成の点でも疑問を抱かせるものなのである。

われわれが感じている疑問に解答を与えてくれる批評家がいる。ポール・クリスタンサン（Paul Christensen）である。クリスタンサンによれば、論文「人間の宇宙」が「自己中心的な文学」（egocentric literature）に対する古典的告発で、当時の作家の自己中心主義を痛烈に批判したものだということである（Christensen 51）。ここでオルソンが本当に取り上げたいのは、ギリシャの哲学者ではなく、当時の作家たちなのだ。その淵源をギリシャのロゴス中心主義に求め、その時から現在まで、人間の「経験」が文学から除外されてきた。「自己中心的な文学」に耽る同時代作家に対して、それでは駄目なのだと歴史的・思想的に論難するのが「人間の宇宙」なのだと、クリスタンサンは言うのである（Christensen 51-52）。

そういう風に解釈するなら、プラトンのアイデア論解釈の粗さも、ソクラテスはプラトンが造形したのだという構成上の弱点も、決定的な弱みにはならないかもしれない。問題は、古典古代のギリシャ哲学にあるのではなく、「人間の宇宙」を書く、現在にあるのだから。オルソンの心の中を覗いてみよう。

v. 自己批判

三人の哲学者を批判した後で、オルソンはこう書く。

私はギリシャ人を非難しているのではない。非難されるのはわれわれだ。つまり、定義においても、表現においても、あるがままの経験を守る方法をわれわれは見出さなかったのである。換言すれば、どの点でも、どの方法でも、現実を分割するのではなく、人間の宇宙に留まる方法をわれわれは見出さなかったのだ(5)。

ここから分かるのは、「人間の宇宙」とは、別の宇宙と比較して「人間の宇宙」と言っているのではなく、ロゴス中心主義に侵されていない、人間が人間でいられる空間を意味していることだ。「あるがままの経験」（experience as it is）を守ることが、「人間の宇宙」に留まる方法だと言うのだから。

ロゴス中心主義批判は、経験を分割されない連続体としてどのように表現するかという、詩論の問題であることが分かるだろう。この「自己批判」を含むⅠ章の「ロゴス中心主義批判」全体が、ロゴスから「経験」をいかにして奪い返すかという詩論であったことを、われわれはここで確認しておくことにしよう。

では、ロゴス中心主義に侵されていない人間の「経験」とはどのようなものであると考えられるだろうか。

Ⅱ. マヤ族の教え

ⅰ. ギリシャから始まる文明とは異なる文明を持った人々

「人間の宇宙」の第二段階で、オルソンはギリシャから始まる文明とは異なる文明を持った人々の間で暮らした経験を物語る。

彼らの際立ったところは、祖先から受け継いだ特徴が愛と肉体だけではないのかと思われるところだ。(中略) かつては彼らなりの偉大さを持っていたが、われわれの道を進むうちに「偉大さは」消え去ってしまった。そして今や、バスの中で身体を接している時や、家族の間で愛の深さや強さを確かめあっている時を別にすれば、現代社会の可哀そうな落伍者なのである。6月に雨が十分降って井戸が満たされていない時、物を洗ったり、飲料にしたりする水を貯えておく知恵さえないのだ。何でもいっしょに行なうという祖先たちの能力を、彼らは失っている。しかし、(中略) 彼らは肉体を違った風に纏う (they wear their flesh with that difference)。そんなことは誰でも知っているという纏い方だ。(中略) 彼らのなかの誰に——子供でも、女でも、男でも——寄りかかっても肉体がこの上なく優しいのである(6)。

ここで語られている人々が、アメリカ人やヨーロッパ人とは異なる文明を持っている人たちであることは分かるが、どういう人種なのか、またどういう民族なのかは、分からない。ただ分かることは、現代文明には後れを取っており、かつての偉大さは影を潜めている民族で、肉体的な優しさを最大の特徴とすることである。とりわけ、「肉体を纏う」といった見なれない表現は、この人々の神秘性を暗示する。

オルソンとこの人々との関係を示す文を見よう。

この人たちが私を受け入れ、互いを受け入れるのは、直接的だった。そして、その肉体から覗く個人は、まさにその人自身であり、私と同じ好奇心の強いさ迷う動物だった——非常に美しかった、人間という動物の眼は、息が詰まらないように肉体をあまり近くに纏っていない時、大変美しかった。いかに人間的で個性的な表情が人間の眼から出てきたことか、眼を宿す家が強調されない場合には(7)。

このような文を読むと、この人々がどのような民族であるかという疑問より、人間らしい人間の眼の表情が描かれていることの方に、われわれの注意は向けられる。そして、この同じ頁で、オルソンは自分を受け入れてくれた民族がマヤ族であったことを明かすのである。1951年に、オルソンがユカタン半島のレルマ (Lerma) に滞在して、マヤ文化の研究をしたことは周知の

事実である (George Butterick lxiv; Tom Clark 190-202; Sherman Paul 87)。

だから、次の節であげる引用はオルソンの興味のありかを、鮮明に示すことになる。

ii. 現代のマヤ族

現代のマヤ人が、独自の生活様式を変えずにいられた理由について、オルソンは以下のような説明を試みる。

- (1) あらゆる生物の表情や振る舞いに興味を持ち続けることができた。人間の顔や、眼、手への興味に加えて少なくとも三つの惑星に対する興味を持ち続けたのだ。これを記録する体系を造り、それが今日では象形文字 (hieroglyphs) と呼ばれる。象形文字は一見して詩 (verse) だと分かる。非常に明快かつ緻密に選ばれた記号が石に刻まれているため、形象 (the images) の描き出す事物 (the objects) の力が保たれている。
- (2) 均斉のとれた石を集め、近くの丘を飾り、それを火の見やぐらや展望台、あるいは囲い地の哨所の一つ (one post of an enclosure) とする。
- (3) 粘土で孔の空いた壺を造り、料理や祭祀に用いる(7)。

こうした事によってマヤ族は、自然を利用する力を持ち、トウモロコシの栽培植物化に成功した。このことは世界の不思議の一つに数えられているという(7)。そうした能力によって、マヤ族に何が出来たのか、オルソンの言葉を聞こう。

この達成の後、ずっと後で彼らは、自分の身体をある種の風味 (savor) と香り (flavor) をもって動かした。それは、アメリカ人の身体がなくなってしまったものだった。灌漑で作ったレタスや、青いうちに摘んで冷蔵庫の中で熟させた果物にはない風味や香りだった(8)。

マヤ族とアメリカ人との生活状況を比較して述べるオルソンの言葉を続けて聞こう。

われわれは仕事をしに来たのに、楽しみの観念が仕事に取って代わる。高見の見物を良しとする風潮が (Spectatorism) が、文化の条件だとして、参加する気持ちを締め出してしまう。(中略) 個人の力も才能もすべて金で買われてしまう。(中略) アメリカでは、商品は果物のようで、人間は商品のようだ。すべて、ぴかぴか光っているが味気ない。それ自身では何一つできない。(中略)。道は死んだ (Der Weg stirbt)。 (9)

引用の内容は、マヤ族の生き方をヒントにすると、アメリカ人の失ったものがいかに大きいか分かるというものである。ドイツ語で示された「道は死んだ」は、アメリカ人にとって、指針となるべきものは何もないという意味だろう。だから進むべき「道」はない。「道は死んだ」は、ニーチェ (Nietzsche) の「神は死んだ」 (Got ist tot) の変奏だと考えられる。

では、どうすれば良いのか。アメリカ人がマヤ族の知恵を獲得し、マヤ族に倣って生きるとは出来ない。アメリカ人は、自分で「道」を見つけなければならない。これまで通って来た「死んだ道」ではなく、「生きる道」を。

Ⅲ. 経験の奪回

i. 人間が原動力を取り戻す道

それは、人間中心に物事を考える道ではない、とオルソンは言う。

人間が原動力 (dynamic) をもう一度持てるようになるだろうか。分らない。しかし、わたし個人にとっては、初めの答えは人間が組織立てた個別の物の中にある。人間破壊に手を貸す従来の系統的論述 (inherited formulation) の問題は (厳命か、神の似姿に対する神の命令により、人間を現象の中心に置く考え方である) そのどちらも自然を認められな
いか、抑圧された第三者として扱うことである (8)。

「人間が原動力をもう一度持つ」ことが困難なためか、文は錯綜しており、読みにくい。しかし、引用5行目の「そのどちらも」が、「系統的論述の問題」と「人間を現象の中心に置く考え方」を指していることが分かれば、引用文の要点は明らかになる。すなわち、人間が原動力を持つための突破口として、「個別の物」と「自然」が捉えられているのである。

しかし、この目的に反する次の二つのうちのいずれかを行なっていないかと、オルソンは読者に問いかける。どちらも、永遠に自分を地獄に落すことになるのだと。その一つは、「魂」を機械的なものにする (making “soul” mechanical)。もう一つは、人間が取り込む物より、外界の現実の方が大きいと認めることである。後者の方が大きな罪だとオルソンは言う (9)。

ii. 内部の形成

人間が自分の内部をどのように形成するのかについて語るとき、オルソンは人間以外の生物も視野に入れようとしている。人間中心の世界観を展開しようとするのではなく、自然の造った生物全体の中で人間の占める位置を考えようとするからである。

いわゆる内部の物 (inner things) が、事物や人や出来事と分離できるという考えに私は満足できない。それらは内部の物の内容であり、それらによって人は内部の物を表わしたり、再演したりする (re-enacts) のだ。偉大なギリシャ人たちが最初に超越的な形相の世界の概念 (the idea of a transcendent world of forms) を作って以来、増殖してきたシンボルの渦巻きに呑みこまれることなく、そうする。私に分かることは、各人が現象の領野 (the phenomenal field) から独自の選択をすることだ。そうすればわれわれは個性について真に語り始められる。しかし、人間特有のこの個人化行為 (individuation) は、自然が造った他の種の個体にも見出せるものなのかどうかは私にははっきりとは分からないのだ (10)。

鍵となるのは「選択」である。「現象の領野」から選び出してくる物によって、人間の内部は構成され、個人になって行く。しかし、選択によって内部を造る方法が、人間特有のものだと考える必要はない。生物すべてに、ありうることだとオルソンは論じている。自己の内部の生成は、更に次のように説明される。

イメージの〔生成〕過程は、イメージ作用を及ぼしている材料と分離して考えることはできない。(中略)形式は内容と分離できないのだ。他のあらゆる哲学の間違ひは、記述的であることだ。それは、ハイゼンベルグが自分の哲学原理に記入することを認めたほど根深い間違ひなのだ。すなわち、集団 (mass) として計測される事物 (a thing) は、その動きを都合上、止めることによってのみ計測される。あるいは、動いている時は、計測のために、一瞬その集団を無視することによってのみ計測される、と。どちらにしても、われわれは、求めているものを得られない——人間に関する限り、彼の生を捉えることはできないからだ。(中略)そして、なぜ芸術が人生の唯一の双子かという——芸術が人生の唯一正当な形而上学だからだ。芸術は記述しようとせず、演じようとする。もし、人がもう一度人生の目的を持つとすれば、そして人生に含まれる責任を果たすとすれば、この人物は次のように考えなければならない。自分自身の〔生成〕過程は、皮膚を通して外側からそっくり内側へ入ってくる。そして、自分自身の転換の力によって再び、外へ排出するのである、と (10 頁)。

イメージの生成過程から話を始め、形式と内容が分離できないこと、哲学の誤りは記述的である点にあることをオルソンは指摘する。ハイゼンベルグが事物をそのまま測定したり、記述することが出来ないことを示してくれたことなどを、オルソンは漫然と話しているように見える。しかし、注意して読めば、この引用は人生を生きる人間の知覚が、どのように外界を捉えるかを動的に描いたものであることが分かる。

自己の内部をどのように形成するかといえば、皮膚を通して外部を内部へ取り込み、内部を育てていくのが人間の生き方だと、オルソンは宣言しているのだ。そこには、自己の人生の「記述」は入らない。「演じる」ことの方が内部の生成を促す正当な行為だとされている。

iii. 内部と自然

人間の行動を内部と自然の動的関係から見ると以下ようになる。

もし人間が活動的なら、体験がやって来るのはまさに、人間と世界の出会う切っ先 (edge) であり、そこは体験が戻されるところでもある。体験がやって来る時、人間が新鮮なままなら、体験が出ていく時も彼は新鮮である。もし、人間が新鮮なままでないなら、彼が家の中で行くことはすべて新鮮ではない、彼が戸口で注意する力が減って行き、家の中はますます新鮮でなくなる。戸口は、彼が自分に対する以上に責任のあるところだ。人間は外部の現実に影響を与えられる。それは愚かしい神秘主義になど戻らなくとも言えることだ。(中略)もし、人間が外部の現実を自分自身の〔形成〕過程の一部とは違うように扱おうとすれば、換言すれば、彼自身の内的生活に相応しくないように扱おうとすれば、彼は(中略)違った風に外部を扱うことになる。彼は、これまで長い間扱ってきたのとまったく同じ風に外部の現実を扱う。勝手に気まぐれな目的のために扱うのだ。その結果、自然の外観が変わるだけでなく、自然の力を留め、抑制するため、最終的には人間が自然を自然に背かせる結果になる。人間はそれほど力があるのだ、小さな者なのに。だが、小さく気まぐれな現代人が認めないのは、自然を自然に背かせる時、現代人は自然を自分にも背かせていることだ。人間は永遠に自然の手に握られているのだから、〔自然を〕自分のために用いようとすれば、自分に不利な結果を招く(11)。

少々長い引用だが、言っていることは一つである。即ち、自分の内部を扱うのと同じように自然を扱え、ということである。自分の内部のために、勝手に自然を扱っていると、ついに自然は通常の働きを阻害されて、自然自体に背くようになり、結局は、無理を強いる人間に背くようになる。だから、自分の内部を扱うのと同じように自然を扱わなければならない。自己を主体とし、自然を容体とする考え方を止めなければならないのである。

iv. 知識人とエネルギーの伝達

エネルギーを伝達しない知識人にどのような非があるかを述べた文である。知識人たちは、「知っている人」だという印象を人に与えるだけで、エネルギーは伝達しない。以下の引用は、ここに胚胎する問題点を指摘している。

過去に関するどんな知識が何を許されて来たのか、人間の記憶のどんな機能が、学問の怪物の手で小出しにされてきたのかを考えると堪らない。人々は学問の怪物を「知識のある」人だと思込まされている。ところが彼らは、自分たちの知っていることを具体化することさえ知らないのだ。更に悪いことには、彼らは過去の立派な作品に含まれているエネルギーをわれわれに伝える方法を知らないのである。彼らは自分たちが仕えている国にとって危険であるという理由で意図的にそのエネルギーを破壊しているのだ。(中略) 私は長く生きるにつれて次のように考えなくなってきた。人間が自然から離れ、自分の可能性(chance)からも離れた究極の理由は、人間が自然の認めないことをしたがる集団の一部だからではないかと——だから、エネルギーは失われるのだ。人間を導く汚物やがらくたを見ると、私はこの子供じみた特技において人間が達成した最も偉大なことが何か分かる——それは、人間の得意なのは、毎日、エネルギーを破壊する、破壊する、破壊する(destroy destroy destroy energy every day) ことなのだ。(中略) 人間は醜い退屈なものになり下がってしまった(12)。

引用の前半(1-7行目)は、学者と言われる人が過去の知識を持つだけで人々に畏怖され、「知識のある人」と思われているが、知識を具体化することもできなければ、過去の優れた作品が持つエネルギーを伝えることもできない無能者であり、そればかりか、保身のために作品が持つエネルギーを破壊する側に回る卑劣漢であることを暴いている。実際にそのような学者を文学系の学問領域で思いつくのは容易ではない。ただ、作品の持っている本当のエネルギーに気が付かず、作品の素晴らしさを説明しているつもりで、真のエネルギーを殺す結果になっている場合はないとは言えない。

引用後半(8-14行目)には、エネルギー破壊が悪であるとの注意喚起と、自然に背く人間としての似非学者の運命が描かれている。自然からも自分の持つ可能性からも離れた、この似非学者は、「汚物」や「がらくた」と表現される下劣極まりないものに駆り立てられて研究し、何らかの成果を上げる。しかし、彼の活動は全体として見れば、エネルギーの破壊に他ならないのである。

「エネルギーを破壊する、破壊する、破壊する」という繰り返しは、『マクシマス詩篇』(*The Maximus Poems*, 1983) 冒頭の「ぼく、グロスターのマクシマスより、きみへ」(“I, Maximus of Gloucester, to You”)のなかの「おお、殺せ、殺せ、殺せ、叩き殺せ／お前を／宣伝に／使う奴

らなど」(o kill kill kill kill / those / who advertise you / out) (*Maximus* 8) を思わせる。

さらに重要なのは、「エネルギー」の伝達を真の学者の使命とするこの箇所が、オルソンの「投射詩論」(“Projective Verse,” 1950) と軌を一にしていることだ。「詩とは、詩人がエネルギーを得た場所から詩そのものによって、はるばる読者の所までエネルギーを伝達するものだ」(*Selected Writings* 16) は、「投射詩論」の三つの要諦のうち第一のものである。第二の要諦は、「形式は内容の延長以上のものではない」であり、第三の要諦は、「一つの感受性は即座に直に次の感受性に移行しなければならない。プロセスを使うのだ」である。

つまり、学者を批評する基準が、投射詩人であるか否かの基準と同じなのである。それは、I 章で見た論述 (discourse) 批判と根を同じくしている。すなわち、「人間の宇宙」で展開する思索は、古典古代に淵源を持つロゴスや論述ではなく、「投射詩論」の方を向いているということだ。論文「人間の宇宙」(1951) は「投射詩論」(1950) と共に、人間にとっての新たな時空を開拓しようとしているのだ。「人間の宇宙」が開拓するのは既にあったヨーロッパの伝統ではなく、これから創るべき新しいアメリカの時空である。

IV. マヤの神話

論文「人間の宇宙」は、内容的には似非学者批判で終わっていると言ってよい。なぜなら、古典古代ギリシャのロゴス批判で始まった論文が、作品のエネルギーを伝える術を知らない似非学者批判で終わるなら、それで論文としての一貫性は達成されているからだ。しかし、オルソンは、「人間の宇宙」最終3頁をマヤの神話で埋め尽くす。以下に拙訳を挙げる。

鳥である方がよかったのだ。マヤ族は鳥であったように見えるからだ。マヤ族はせわしなく頭を動かしている、生き抜くために。何に取り囲まれているか機敏に知っておくために。蛇と見えたものに対しても、畏れ敬うべきあの大きな鳥に対しても。マヤ族が死ぬと身体のを食べに来るヒメコンドル (zopilote) に対しても。あるいはマヤ族は、夜のうちに息切れしたか脚を折るかした鹿をずたずたに引き裂くイナゴの群れのような黒い塊の中に、朝、ヒメコンドルの姿を見ることもある。あるいはヴィーナスをさえ、マヤ族は警戒している。あたかも、彼ら自身がホシムクドリ (grackle) ででもあるかのように。フルートのように穴のあいたヴィーナスの家を垂直に攻撃できていると思っている。しかしヴィーナスが優勢になると、東風に乗せて、彼らの皮膚に病気や砂利 (granitos) を吹き付ける。ヴィーナスが新しい時、朝の空をブンブン鳴らす時には、マヤ族は恐れて家の中に隠れている。シューエク (Shoo Ek) というヴィーナスの一囁みを恐れている。ヴィーナスはスズメバチ (Wasp) なのだ。ヴィーナスがマヤ族を打ち倒す方法は、このようだった。去年のことだが、あの電機棒がある漁師の頬に当たった。カユーコ (cayuco) の船首に座って、ツノザメ (dogfish) 釣りの糸を日がな垂らしていた漁師は、深い穴に突き落とされて (in all the gulf hit him) 死んでしまった。漁師の身体に残っていたのは、妻に与えられた軽いキスの歯の燃えた跡だけだった (with no more mark than burned on him than that little tooth of a kiss [by] his wife was given)。人々がその漁師を浜辺に引きずり上げた時、漁師は金になるサメを釣り上げているところだったらしい。

あるいは太陽 (Sun) がそうであったように、男と女になるためには、太陽は月 (Moon) に耐えなければならなかった (the way he had to put up with Moon)。初めから終わりまで月は、自分流に振る舞ったので、太陽はそれに対処しなければならなかった。なぜなら太陽

は月に対して有利な点をもっていたからである、すなわち早く動けたのだ。初めの中は、太陽はただ若く、自分のやり方を通すだけだった。そして月は、そう、若い娘で祖父と暮らしており、少女がしそうなことをしていた、布を作っていたのだ。その時でも太陽は月より、有利な点を持っていた。[布を作るのではなく] 太陽は狩りをした。そして狩りができたので、ハミングバード[和名ハチドリ]になることができた。月に近づきたい一心で、太陽はハミングバードになった。月はそれほど美しく、その美しさを味わいたいと太陽は思ったのだ。ただ困ったのは、太陽がハミングバードの仮面をかぶり続けなければならなかったことだ。それで太陽が月に近づいて行くと、タバコの花からタバコの花へと飛び移って家に近づいたのだが、月の祖父が吹き矢筒から放った（from a blow gun）土弾^{つちだま}で（with a clay shot）、太陽を撃ち落としてしまった。そして太陽は月の腕の中へ落ちた。月は太陽を自室へ連れて行き、母親のように世話を焼いた、月には太陽の妻となる準備がすっかり出来ていたのである。妻として男の二番目の母になるのは、こういう部分だった（in these parts）、そこは鳥がしばしば石を当てられて意識を回復しなければならなくなる所だ。しかし翼に損傷がなければ、再び飛んで行ける。太陽はそうだった。ただ太陽は話すこともできたので、カヌーで私と一緒に駆け落ちしないかと月を説得した。しかし、お分かりだろう。常に危険はある。祖父が二人に向かって火を雨のごとく降らせたのだ。太陽は亀に姿を変えて、しぶとく生き延びたが、月は蟹の甲羅をかぶったものの、十分身体を覆うことが出来ず、死んでしまった。

それはほんの一部だった。外から見た部分であり、ドラマの全てを含んでいるように見える部分である。だが、それは見えるにすぎない。というのはトンボが月の肉と血を13の空ろな丸太の中に集めるからだ。その丸太は、太陽が必死になって集め、逃げるためのボートを造った丸太だった。ボートが出来たと思ったとき、ついに月は自分のものになったと思ったのだ。愚かな太陽は。今、ここに太陽は帰って来た、13日後に13の丸太を掘ってみた、そして分かったのは13のうち12までに昆虫や蛇がいることだった。昆虫や蛇は人間の大地を飛び回るとか這い回るなどして、暑い風土の人々を毒で汚染した。その結果多くの人が[人生を]まともに始める前に死んでしまった。ほとんどの人はいつ病気にかかり、身体が腫れ始めるかわからない状態だった。だから最良の策は、静かに横になって、毒が出て行くのを待つことだった。というのは13番目の丸太があったから。そしてこの丸太が生き返った月を見せたからである。月に欠けていたのは、女を女にする部分だった。そして鹿だけが、鹿だけが月に与えることができた。鹿が月に与えるものによって、月と太陽は男と女が喜んですることを出来るようになるのだった、絶え間ない猛打からの一時的休息として（as one respite from the constant hammering）。

けれどお分かりのように、持続するものなどない。月には兄がいた、この兄がやって来て、太陽と月と一緒に暮らすようになった。月と大きな星(the big star)の間で何かが起こっていることを、疑う理由が太陽にはあった。なぜなら、この兄こそ空の第三の者、しばしば月と共にいる悪魔のような、あるいはスズメバチのような者(waspish one)だったからである。策略を用いて太陽は二人の正体を見た(sun discovers them)。すると月は、氣力をなくして、一人で川の土手に座り込んだ。月は、ヒメコンドルに説得されて、一緒にハゲタカの王の家に行くことになった。確かにハゲタカは、見たところ太陽ほど美男子ではないが、騙されてはいけな。空を暗くすることも出来れば、死んだ物を食らうことも出来るのだ、残った骨だけが太陽にさらされて白くなるまで。ハゲタカに魅力がないなどと、

ハゲタカは月にとって魅力的ではないなどと、特にハゲタカたちすべての王に魅力がないなどと信じてはならない。月はハゲタカの王を迎え入れ、彼を三人目の夫にした、月はハゲタカの王の妻になったのである。

だが、太陽が月を必要としなくなったわけではない。月が欲しいので、太陽は月に力を与えた鹿に助力を求めた。太陽は鹿の皮を借りて、その下に身を隠した——熱い太陽はハゲタカの習性を知っていたので——太陽は腐肉のふりをした。最初のハゲタカがやって来て、少し離れたところにぎこちなく着陸した。そこから神経質そうによたよたと近づいてきて、小鹿の肉だと思ったところをもぎ取ろうとした。この時、太陽はハゲタカの背に乗り、月のいる所まで行ったのである。太陽は勝ち誇って月を捕えたものの、月はどこか帰りたくなさそうだった。

その段階で、理由は定かではないが (for reasons of cause or not)、太陽と月は空に昇り、永遠に惑星としての義務を果たすこととなった。しかし太陽は、月に対して最後に一つのことをしなければならないことに気がついた、人間が月に満足する前に。太陽は月の片方の目を叩き出さなければならなかった (knock out)。人間たちが不平を言っていたからである。月があまりに明るいので眠ることができない、夜も昼もほとんど同じで、昼は明るすぎて我慢ならない。夜の気持ち良さといったものも、少しは必要だ、と。太陽は望み通りにした。月の目を叩き出し、人間たちに望みの物を与えた。だが、太陽が人間たちにもっと多くの暗さを与え、時としてすっかり月蝕にしてしまうと、いつの日か、それは太陽と月が闘い続けている徴になった。それは、太陽が月の淫らな行為を忘れられないためだと考えられた。しかし、他の者が言うには、月は永遠に常軌を逸しており、大変な嘘つきなのである。地上の人々は月と同様に不品行で、酒に酔い、月のするような行ないをしている、と月はいつも太陽に語っているのだ。事実、年寄りたちの言うには、月はどんな淫乱な女にも劣らず、理解しがたいのだった。

ああ、彼らは自分が住む世界にとって熱すぎる存在だったのだ、これらマヤ族は。皆と仲良く暮らすには熱すぎたのだ (hot to get it down the way it was) ——皆と仲良く暮らすには、わが同朋よ (12-15)。

上に引用したマヤの太陽と月に関する神話には、一見したところ、普遍的な論理性は見いだせないように思われる。論述やロゴスといったものが構成原理になっていないのは確かである。したがって、古典古代のギリシャに源泉をもつ文化や文明とは、まったく違うところに成立した神話だと思われる。

誠実で熱心な「太陽」と淫蕩で節度のない「月」、天体どうしの愛のあり方を見て、われわれは驚くばかりだ。ただし、「太陽」のひたむきな求愛にわれわれは感銘を受けずにはいられないのも確かである。また、「月」が「鹿」の助力によって女性性器を回復した時の、「月」と「太陽」との性交描写にすさまじいまでの真剣さを感じないでいることは難しい。「絶え間ない猛打からの一時的休息として」喜ばしい性行為が可能になった、と書かれている箇所である。最後に一つ。「月」に目が二つあったのでは明るすぎて困るという人間たちの苦情を受けて「太陽」が「月」の片目を叩き出す件は、神話でなければ見られない現実感を持っている。「太陽」が人間たちに施す「暗さ」の過剰サービスもユーモラスである。つまり、論述やロゴスが構成原理になっていなくとも、「太陽」と「月」に関する神話は面白く読めるのである。では、本稿の目的と、マヤ神話の読後感とを突き合わせてみよう。そして、われわれの課題を終えることにしよう。

本稿の第一の目的は、「人間の宇宙」をマヤの神話で終わらせることにどのような論理が見出せるのかを探る、であった。その回答を提出すると、以下ようになる。ロゴス批判で始めた論文を、論理的 (logical) に終わらせるのではなく、西欧的な論理の見いだせないマヤの神話で終わらせることによって、ロゴス批判は徹底する、である。いかにも古典的な論文名「人間の宇宙」が、マヤの神話で終わると思う人は稀であろう。筆者も先行する章と緊密な脈絡を欠くマヤ神話によって、突然論文が閉じることに当惑した一人である。しかし、神話の論理といったものは、マヤ神話に見出せる。それはすでにロゴス (理性、論理) ではなくミュトス (神話) の領域に属す論理である。ミュトスとロゴスの関係については、『ミュソロゴス』(Muthologos, 1979) 所収の「詩と真実」(“Poetry and Truth,” 1968) で更に進んだ考察が展開されている (平野 2011 年参照)。

本稿の第二の目的は、詩論構築者オルソンのどのような面を明らかにするかを究明することであった。西欧の論理が通用しないマヤの神話で、論文「人間の宇宙」を閉じる方法は、直線的論述を回避し、エネルギーを伝えることを是とする「投射詩論」と馴染むと思われる。「人間の宇宙」と「投射詩論」によって、オルソンは 1950 年頃の閉塞した文明を撃ったのだと思われる。マヤ族の神話の結びをもう一度、ご覧いただきたい。

ああ、彼らは自分が住む世界にとって熱すぎる存在だったのだ、これらマヤ族は。皆と仲良く暮らすには熱すぎたのだ——皆と仲良く暮らすには、わが同朋よ。

自分が住む世界にとって熱すぎたマヤ族は、「人間の宇宙」と「投射詩論」の主張に重ならないであろうか。われわれが読んだ論文「人間の宇宙」は熱い論文だったのである。「投射詩論」が熱い詩論であったのと同様に。

本研究は、平成25年度-28年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C) 課題番号 25370316 の支援を受けた。

引用文献

- Butterick, George F. *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson*. Berkeley: University of California Press, 1978. Print.
- Christensen, Paul. *Charles Olson: Call Him Ishmael*. Austin: University of Texas Press, 1975, 1979. Print.
- Clark, Tom. *Charles Olson: The Allegory of a Poet's Life*. New York: Norton, 1991. Print.
- Diels, Hermann. *Die Fragmente der Vorsokratiker*. Berlin-Charlottenburg: Weidmannsche Verlagsbuchhandlung, 1956. Print.
- Eliot, T. S. *Four Quartets. Collected Poems, 1909-1962*. London: Faber and Faber, 1963. 189-223. Print.
- Olson, Charles. *Call Me Ishmael: A Study of Herman Melville*. San Francisco: City Lights Books, 1947. Print.
- . *Human Universe and Other Essays*. Ed. Donald Allen. San Francisco: Auerhahn Society, 1965. Rpt. New York: Grove Press, 1967. Print.
- . “Human Universe.” *Human Universe and Other Essays*. 3-15. Print.
- . *The Maximus Poems*, Ed. George F. Butterick. Berkeley: University of California Press, 1983. Print.
- . “Poetry and Truth,” 1968. *Muthologos* II. Ed. George F. Butterick. Bolinas, Cal.: Four Seasons Foundation, 1979. 7-54. Print.
- . “Projective Verse.” *Selected Writings*. Ed. Robert Creeley. New York: New Directions, 1966. 15-30. Print.
- Paul, Sherman. *Olson's Push: Origin, Black Mountain, and Recent American Poetry*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1978. Print.
- 平野順雄, 「チャールズ・オルソン著『ミュソロゴス』—「詩と真実」について—」. 『人間関係学研究』第10号 (2011年度), 41-54頁。